

令和 6 年 5 月 17 日現在

機関番号：34316

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K12819

研究課題名（和文）近代日本の複合宗教帰属：『回覧集』執筆者の宗教体験言説、実践、共同性の分析から

研究課題名（英文）Multiple Religious Belonging in modern Japan

研究代表者

古庄 匡義（FURUSO, Tadayoshi）

龍谷大学・社会学部・准教授

研究者番号：40710447

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,200,000円

研究成果の概要（和文）：網島梁川と彼の思想に共鳴する人々によって形成された共同性や実践について、彼らの宗教的な帰属の多様性に着目して分析した。その結果、次の3つの成果を得た。第1に、網島梁川や西田天香の宗教的な思想や実践について、「複合宗教帰属」の観点から検討することができた。第2に、網島梁川の思想と実践、そして網島に共鳴する者たちの共同性を総合的に論じた『網島梁川の宗教哲学と実践』を出版できた。第3に網島思想に共鳴する者たちが執筆した回覧ノートである『回覧集』を分析できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

網島梁川は明治後期の宗教思想に大きな影響を与えた人物であるが、網島研究は十分進展していなかった。その原因は網島が特定の宗教に帰属しておらず、複数の宗教を摂取しながら宗教思想を形成したためと思われる。本研究では、複数の宗教に対して帰属意識をもつ「複合宗教帰属」の概念を基盤にすることによって、網島思想を分析する新たな視角を見出した。また、本研究で分析した『回覧集』は、当時の知識人の宗教理解がよく表れている重要な資料であるため、『回覧集』の分析や翻刻には大きな意義がある。

研究成果の概要（英文）：We analyzed the communities and the practices formed by Tsunashima Ryosen and those who sympathized with his thought, focusing on the diversity of their religious belongings. As a result, we achieved the following three results. First, we were able to examine the religious thoughts and practices of Tsunashima Ryosen and Nishida Tenko from the perspective of "multiple religious belonging". Second, we were able to publish "The Philosophy of Religion and Practice of Tsunashima Ryosen," which comprehensively discusses the thought and practice of Tsunashima Ryosen and the community of those who sympathized with him. Third, we were able to analyze "Kairansyu," the circulated notebooks written by those who sympathized with Tsunashima's thought.

研究分野：宗教哲学

キーワード：宗教哲学 宗教学 網島梁川 明治 宗教体験 言説 複合宗教帰属 宗教実践

1. 研究開始当初の背景

「宗教」概念を自明のものとし、これを前提とする近年の宗教学において、神秘主義や宗教体験の概念が再検討されている。19世紀末以降の、個人の内的、直接的な「体験」を中心とした「神秘主義」理解は、宗教体験の普遍性や超歴史性を意識的、無意識的に前提している。それに対しKatz1983などは宗教体験が宗教的文化的「伝統」によって媒介され、形成されることを強調するのだが、そうすると神秘家の宗教体験言説の生々しさや事実性、豊かさを捉え損ねるという批判もある(鶴岡2000、深澤2006)。

ただ、近代日本の網島梁川(1873-1907)の周辺を研究する立場からすると、神秘主義の分析にあたっては、体験と伝統だけでなく、宗教への「帰属」意識も重要な項だと考える。網島の周囲に集まる者たちの宗教への帰属は実に多彩である。さしあたり彼らを3つに分類できる。(a)仏教やキリスト教など特定の宗教への帰属意識を基盤に宗教多元的な思想を構築する者(川合山月など)や、(b)宗教体験や宗教実践を基盤に諸宗教を選択的に受容する者(西田天香など)、(c)帝国大学のエリート学生のように、宗教体験を求めて諸宗教の思想を追究するものの、体験や信仰は得られず、宗教への帰属意識ももてない者(安倍能成・宮本和吉など)である。彼らは共通して、帰属意識の違いを尊重し合い、宗教体験を超歴史的なものとして重視しつつも複数宗教の伝統を用いて自らの宗教体験や信仰(あるいは信仰が持てない苦悩)を言説化し合う。そうすることで彼らは、共有する宗教多元的な思想内容を一緒に伝道し、さまざまな実践を共に行う共同性を構築しようとした。この共同性を分析するには「体験」と「伝統」を介した言説化という2項だけでは不十分で、多彩な宗教への「帰属」に対する精緻な分析が必要不可欠である。

このような網島を慕う者たちの宗教的な帰属を考える上で重要な資料が『回覧集』である。『回覧集』は、網島の死の1ヵ月前から約3年間書き綴られた回覧ノートであり、網島を慕う者たちが宗教的な思想や感想から身辺雑記までが自由な形式で書き連ねられている。執筆にはキリスト教や仏教への帰属意識をもつ者も、宗教的な帰属意識を持っていない者もあり、彼らは宗教的な感想や体験を共有したり、宗教的な思想を自由に論じ合ったり、ときには絵画や写真、網島からの私信なども貼り付けたりもした。このような『回覧集』は、さまざまな宗教的帰属を有する者たちの共同性や交流、帰属意識を分析するのに相応しい重要な資料なのである。

そこで本研究は、この『回覧集』を分析することによって、さまざまな宗教的帰属を有する者たちの共同性や思想交流を分析し、宗教への帰属意識が宗教体験の言説化の分析のための重要な項目であることを明らかにしようとした。

2. 研究の目的

本研究では、宗教体験の言説化について体験と伝統の二つの対立軸で論じる諸研究に対し、諸宗教への帰属意識という第三項も分析に含み入れる重要性を示そうとした。そのために、近代日本の宗教思想家、網島梁川と彼を慕う人々の宗教への帰属意識をカトリヌ・コルニールの「複合宗教帰属」という概念で分析することを試みた。

網島や彼の周辺の人々は、帰属意識の違いを尊重し合い、宗教体験を超歴史的なものとして重視しつつも、各自の仕方で複数宗教の伝統を用いて自らの宗教体験や信仰(あるいは信仰が持てない苦悩)を言説化し合った。彼らの宗教伝統への帰属の仕方が多様だったからこそ、超歴史的で普遍的な宗教体験や宗教多元的思想の「伝道」を行うゆるやかな共同性が形成されつつあった。本研究は、この共同性を分析するには「体験」と「伝統」だけでなく、多彩な宗教への「帰属」に対する精緻な分析が必要であることを示すことで、宗教体験言説研究に新たな視角を提供しようとした。

3. 研究の方法

本研究は4点の研究課題に取り組んだ。

本研究の分析の基盤となる「複合宗教帰属」の概念について論文等にまとめ、この概念をさらに彫琢する。

網島梁川やその関係者の資料を現地で蒐集することを通して各地の梁川会の現地調査を踏まえて、『回覧集』執筆者の文献を網羅的に蒐集・分析し、執筆者の宗教的アイデンティティを「複合宗教帰属」の概念を用いて整理し、彼らの宗教多元的な思想や実践、共同体形成を総合的に分析する。

近代日本の宗教思想や宗教哲学を展開した思想家の宗教的な帰属が当人の思想にいかなる影響を与えたのかを分析することで、「複合宗教帰属」と宗教思想の形成との関係性を解明する。

本研究での資料調査・実地調査を踏まえて注釈や解説を作成した上で、『回覧集』全7巻のうち、其一、其二の翻刻を出版する。

4. 研究成果

上記4点の研究課題について、以下のような研究成果を得た。

綱島梁川や西田天香の宗教的な思想や実践について、「複合宗教帰属」の観点から論文にまとめることができた。

現地調査については、コロナ禍の影響もあり、十分に行うことはできなかった。ただ、岡山県高梁市の歴史文化博物館に所蔵されている綱島梁川関係の資料を調査することはでき、その際に収集した多くの写真や資料を拙著『綱島梁川の宗教哲学と実践』に掲載した。綱島梁川の周辺にいた人物について写真を用いながら紹介することで、綱島梁川を中心とする共同性を具体的に解明できた。

綱島梁川の宗教哲学と彼の宗教的な実践・伝道との関わりについて、同時代の宗教思想や実践、あるいは綱島を慕う者たちの共同性や実践との関係も含めてまとめた著作『綱島梁川の宗教哲学と実践』を刊行することができた。この著作を刊行することで、同時代の「日本の宗教哲学」の思想潮流の中での綱島梁川の位置づけというさらなる研究課題を見出すこともできた。

『回覧集』の翻刻については出版できなかった。その原因は、まずは翻刻作業の遅れにあるが、出版を検討していただいた出版社に『回覧集』を数巻に分けて翻刻・出版するよりも、1冊にまとめて出版した方がよいと提案いただいたことにも起因する。現在其二を翻刻しており、全7巻の翻刻を完了するにはかなりの時間が必要となるが、着実に作業を進めて出版する所存である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 古荘匡義	4. 巻 46
2. 論文標題 【問題提起】実験と言説 網島梁川からの宗教思想運動	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 現代と親鸞	6. 最初と最後の頁 187-202
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古荘匡義	4. 巻 62
2. 論文標題 宗教体験を認め合うこと 星川啓慈の「言語ゲームとしての宗教」論の検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 龍谷大学社会学部紀要	6. 最初と最後の頁 154-166
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古荘匡義	4. 巻 59
2. 論文標題 網島梁川の言語ゲーム	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 龍谷大学社会学部紀要	6. 最初と最後の頁 64-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 古荘匡義	4. 巻 38
2. 論文標題 網島梁川の宗教体験と宗教哲学	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 宗教哲学研究	6. 最初と最後の頁 48-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 古荘匡義	4. 巻 4
2. 論文標題 証言としての宗教体験言説 網島梁川の思想と実践	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 世界仏教文化研究	6. 最初と最後の頁 75-94
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 古荘匡義	4. 巻 20
2. 論文標題 網島梁川における見神と批評	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 宗教と倫理	6. 最初と最後の頁 65-79
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 古荘匡義	4. 巻 22
2. 論文標題 宗教体験に基づく複合宗教実践の諸相：網島梁川から西田天香へ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 龍谷大学国際社会文化研究所紀要	6. 最初と最後の頁 203-215
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 古荘匡義
2. 発表標題 明治後期の宗教哲学の系譜
3. 学会等名 宗教哲学会第16回学術大会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 古荘匡義
2. 発表標題 信仰と宗教哲学 姉崎正治の場合
3. 学会等名 日本宗教学会第82回学術大会パネル「現代世界における宗教哲学の可能性」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 古荘匡義
2. 発表標題 宗教体験を認め合うこと - 私的言語論と言語ゲーム論の狭間で -
3. 学会等名 日本宗教学会第81回学術大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 古荘匡義
2. 発表標題 網島梁川の宗教体験言説と伝道：言語ゲーム論による分析
3. 学会等名 日本宗教学会第80回学術大会 パネル「宗教哲学研究から見た宗教概念批判の意義」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 古荘匡義
2. 発表標題 実験と言説 網島梁川からの宗教思想運動
3. 学会等名 第6回清沢満之研究交流会（招待講演）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 川瀬 雅也、米虫 正巳、村松 正隆、伊原木 大祐	4. 発行年 2022年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 350
3. 書名 ミシェル・アンリ読本	

1. 著者名 伊原木大祐、竹内綱史、古荘匡義	4. 発行年 2023年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 288
3. 書名 宗教学	

1. 著者名 古荘 匡義	4. 発行年 2022年
2. 出版社 法蔵館	5. 総ページ数 276
3. 書名 綱島梁川の宗教哲学と実践	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------